

2013年度前期卒業式式辞

本日、学士の学位を得た学部卒業生 12 名、修士の学位を得た大学院修士課程修了生 4 名、そして、博士の学位を得た大学院博士課程修了生 1 名の計 17 名の皆さんを、本年度前期卒業生、修了生として送り出すことができますことを大変嬉しく思います。皆さん本当におめでとうございます。列席の理事・副学長、学部長とともにご卒業を心からお祝いいたします。

皆さんの中には、8 年、9 年という大学学部の在籍を経て卒業される方もおられます。入学から卒業までの間の精神的、経済的負担は大きなものがあったと思われませんが、挫折することなく、今日を迎えられました皆さんに敬意を表しますと共に、この間皆さんに同伴されたご家族の皆様にも心からお祝い申し上げます。

皆さんの卒業は、皆さん個人、そしてご家族の喜びだけではなく、皆さんの大学生活を支えてきた社会の喜びでもあります。

皆さんには、私の言う<社会の喜び>という一節は見えにくく、理解しがたいものかもしれません。しかし、国立大学法人和歌山大学には、皆さんの授業料等以外に年間 40 億近い国費が投入され、皆さんの大学生活を支えてきたのです。教育経費の国際比較においては、日本の大学では、家族負担が多く、国家的な支援が少なすぎるという批判があります。しかし、私学における大学生とその家族の負担は、皆さんと比べれば倍以上です。このように国家が、国立大学に多くの財政支出をしているのは、皆さんが社会に参加し、自らの幸せだけでなく、多くの人々の幸福のために貢献してくれることに期待しているか

らに他なりません。

先に、皆さん方の卒業は、社会にとっても喜びでもあると申し上げた根拠は、以上のようなことです。

さて、ここで、先日中央アメリカに位置するグアテマラ共和国を訪問した際に考えたことを申し上げたいと思います。

私は、8月28日から9月6日にかけて、25年にわたり協定に基づく交流を続けているグアテマラ唯一の国立大学サンカルロス大学を訪問しました。サンカルロス大学は、本学が最初に国際的連携協定を結んだ大学であり、今回の訪問において、カルロス・エストゥアルド副学長等首脳陣と懇談、両大学の研究交流、交換留学など今後の交流についての協議等を行いました。

私は、協議や交流において、唯一の国立大学としてのサンカルロス大学が、1960年代から30余年の内戦を経て、今なお多くの困難を抱える国家、社会の課題を大学として受け止め、新たな社会形成に参加する強い決意と覚悟をもっていることに、同じ大学人として深く感銘しました。

また、グアテマラでは、本学の宮西照夫名誉教授と学生たちが長くコミットしている内戦とハリケーン（スタン）により被害を受けたマヤ民族を支援するNGOグループ（IXMUCANE：イシュムカネ）の小学校なども訪問視察しました。そして現地で中心となっておられる、前サンティアゴ・アティトラン市長でもあり、弁護士であるマヌエル氏などと交流しました。

このマヌエル氏が、語られたことを皆さんに紹介したいのです。彼は、先住民族、マヤの出身で、貧困のどん底の中から、たまたま出会った教師、そして

友人、友人家族から食事や住居などの支援を得て、高校、大学で学び弁護士資格をとった、グアテマラでは、数少ないエリートです。そのマヌエル氏は、こう言われました。「友人たちのなかには、あなたがもっと自分のためにエネルギーを注げば、もっと豊かになり、もっといい生活ができるようになりますよという者もいる。しかし自分はそうしたくない。多くの子どもが学校にも行けるようになり、多くの子ども、家族が貧困から少しでも脱することができるようにしたい」と。そしてこのマヌエル氏の周りには、彼を尊敬し、目を輝かせてこの活動に参加する多くの青年がいました。その青年たちは、日頃は働き、週末は大学で学んでいると語っていました。

ひるがえって日本を見てみますと、社会の成功者の一部は、このマヌエル氏とは異なり、自らの成功はもっぱら自らの努力の賜物であり、自らの独占物であるという認識に立ち、自らのもとの働く若者に、過酷な労働と過度な競争を強いているように思われます。これは、皆さんが、これから生きていく時代と社会の一面であります。

どのような生き方を選択するかは自分で決めることですが、日本にはマヌエル氏のようなモデルが少ないので、その意味で、日本の若者はグアテマラの子ども・若者とは違ったレベルの困難を抱えていると言えるでしょう。

以下は、昨年この場で申し上げたことですが、敢えて同様のことをお伝えしたいと思います。

本日皆さんは、大学・大学院から社会へと巣立つわけですが、自分が属する会社、組織は、いつまで持続するのだろうかなど、自分自身の基本的な生活を

確保できるかどうかという不安、これから始まる人生の前途への不安が大きく覆っていることと思います。

こうした事態にあることを認識しますと、私としては、皆さんに安易に生き方を語ることはできません。

今、皆さんに申し上げられることは、こうした若者の苦しみ・不安は、世界共通のものであるということ、そして世界の若者、日本の若者が、その苦しみや不安に立ち向かい始めているということ、そして、若者の「自己責任」論を厳しく排し、若者の未来を応援しようとする方々も少なくないということです。

不安や悩みに襲われた時は、その不安、悩みを語れば、必ずあなたに共感し、思いを共有する他者を見出せることでしょう。そして、その他者とともに、励まし合い、厳しい現実と闘うことも可能となるでしょう。

和歌山大学は、「生涯、あなたの人生を応援します」とメッセージを発しています。人生の岐路に直面した時、母校を思い起こし、リターンしてください。教職員は勿論のことですが、同窓会の諸先輩方も全国各地で皆さんの人生の応援団として待っていて下さいます。そのことを最後にお伝えし式辞といたします。

2013年9月24日

和歌山大学長 山本 健慈